

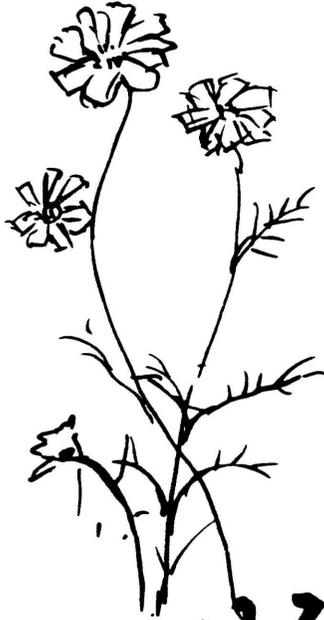
牙二号

付多ゆらと

杵貝と

海光了

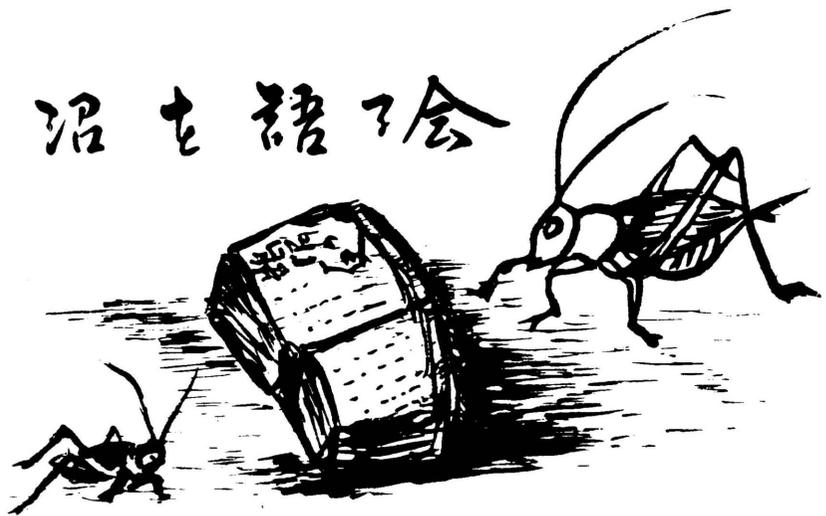
水か故里



鶴

沼

鶴沼を語る会

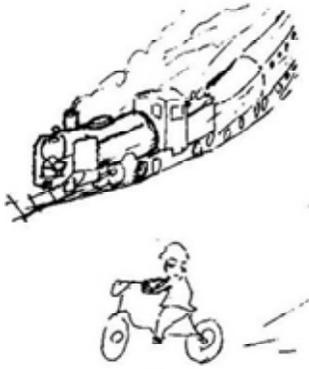


鵜沼と私

鵜沼公民館長

吉田興一

特急列車の窓から眺める風景に、宵暗みがようやく濃くなる頃、間もなく藤沢を通過する。小田急の小さなホームが見えた。跨線橋の階段を下りて、小田急へ出る手前の木柵が、懐かしく視線をとらえた。つい五、六日前、そこを通過して鵜沼の伯母の家へ行ったこと。従兄弟たちが暖かく迎えてくれ、楽しさにうずもれて、またたく間に過ぎして了ったこと。それらが私に懐かしさを感じさせたのだろう。



いま国鉄藤沢駅で、かつてと同じ場所が一箇所あるが、あの当時、私がこの地に住むとは夢想だにしなかった。当時私は、高等学校の理科にしようか、父のように陸士に進もうか迷っており、鵜沼の慶応に通っている従兄弟たちとは別の世界にいると信じていたし、この地の市役所に勤め、それを職業にしようなど、想像を絶したことであった。敗戦のあくる年、わが家は鵜沼にあり、私は旅順工大の学生に身分で単身引揚げてきた。荒涼、索漠、乾燥の大陸と余りに違った湿った空気と穏やかな鵜沼海岸緑濃い江の島のことなど、鵜沼の結びつきは、まだいくつもあるが次の機会に譲り一まず筆をおきましよう

その当時珍しかった競争用の自転車で、広大な松林のなかの別荘から垣根ごしに伸びた木陰のなめらかな路、江ノ島までの遊歩道路、いずれも肌に快いスピードで、新鮮な海辺の磯の香りを満喫した。鵜沼銀座と教えられた小さな商店街、人通りもまばらな静寂のなかの簡素な郵便局、明るい海岸の広々とした砂山、ほんの僅かな滞在ながら、鵜沼の印象は珍に鮮やかであった。昭和五十一年の現在、鵜沼公民館長として、出勤の途中や、執務中などの折りふれ当時のことを思い出す。当時とは、昭和十五年、旧制中学の四年にあがる直前の春休みのことである。中学二年の弟と二人で、北九州小倉から久し振りで東京の親戚たちを訪ねた小旅行の一駒である。



鵠沼の歴史(二)

大庭御厨と鵠沼

山上憶良は七二〇年遣唐使少録となり、七一六年伯耆守となり七二六年筑前守となりその当時の有名人である柿本人麿や山部の赤人よりはるか政府の高官であった。その憶良が何故反体制的、反抗的といえるあのような人間性の香りの高い社会思想的の詩を作ったのであろうか、
 「貧窮問答歌」彼がこれを作ったのは筑前守をやめて太宰府から上京する前年七三一年(天平三年)七十二才の時である。自分の貧乏時代をふり返り民衆の困難な生活を見ていると人麿の天皇讃歌の叙情詩や赤人の
 田子浦ゆうち出でてみれば真白にぞ不二の高嶺に雪は降りけり
 の如き大叙事詩はできなかつたかもしれない。
 しかし、山上憶良によって作られた貧窮問答歌により私達は当時の民衆の歴史と、それによる政治体制を知り、かつ、千二百年前の政治批判と悪官僚に對する警告が現在にも通用する痛切なる反骨精神

神を教えられるのである。



風まじり雨降る夜の雨まじり
 雪降るの夜はすべもなく寒々しあれば
 堅塩を取りつゞしる糟湯酒うち
 嚼るいて咳ぶかひ鼻ひしびしに
 しかとあらねひげかき撫でて、吾おき
 て人はあらしと誇るえど寒々し
 くあれば麻衾引き被り有肩
 衣のありのことごと服襲へども寒き夜
 すらを吾よりも貧しき人の父母は
 飢え寒からむ妻子どもは乞ひて泣く
 らむ此の時はいかにしつゝ、か汝が世
 は渡る。
 以上が問いの部である。大体の意味は
 風雨はげしい雪まじりの夜は寒くて仕方
 がらないから塩をかじつてむせて咳をし、鼻
 つまらせながら人物はザラにあるまい、と威張つ
 俺のような人物はザラにあるまい、と威張つ
 てはみるかぶつてみるか何分にも寒いで布団や袖な
 しをひつかぶつてみるか何分にも寒いで、
 それでも寒い。こんな夜に俺より貧乏な
 人はどうしているかな、父母は腹がへつて

るだろうし、妻子も食を求めて泣いている
だろう。そうゆう時には、どうして暮してい
くのか？)

これに対して長歌はさらに答えて

天地は広しといえど、吾が為は狭くやなりぬる
日月は明しといえど、吾が為は照りや給はぬ
人皆か吾のみや然る 邂逅むくわいに人とはあるを

人並に吾も成れるを、綿もなき布肩衣
の海松の如きわけそがれる檻かか襖ふのみ
肩に打ち懸け伏廬の内に直土に

藁解き敷きて父母は枕のほうに、妻
子どもは足の方に囲み居て憂い吟ひ
竈には煙吹き立てずこしきには蜘蛛

蛛の巣かきて飯炊ぐ事も忘れて、ぬ
え鳥の呻吟ひ居るにいとのかきて短き
物を端載ると言えるが如く楚取る

里長が声は寢屋床まで来立ち呼
ばひぬ期ばかりすべなきものか
世間の道、

こゝにはもう余裕やユウモアなどない。

(広い天地も私には狭いのか、明るい月日は自分には照らないのか、このような生活をみんなが苦しんでいるのだろうか、それとも

私だけなのかしら？

たまたま同じ人間として生を受けながら
綿のない袖なしのボロボロになったのを肩
をかけ、低く傾いた小屋の中、床のな

い地べたに藁をしき、頭には父母、足のほうに
は妻や子が私を取り囲んで嘆く。

カマドには火の気がなくせいろうにはクモの

巣が張り、飯をたく方法も忘れてしま

つたようだと言っているところへ

「短いものさえもつと切りとる」ように、里長
がやって来る。枕元まできて税金を納め

ると怒鳴るのだが、あゝ、生活とは

こんなに苦しいものなのか)

この返歌は

世の中を憂しと恥しと思へども

飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

(こんな貧乏な世渡りはつらく恥かしい

かといつて鳥ではあるまいし飛び

立って世を去ることもできない)

民衆の生活は何時代の時代も変わっていない

い。しかし私が興味を持ったのは人間は一人

で生きてはいかれない以上必ず集団生活を



嘗んでいたはずであり嘗まざるを得なかつたはずである。私たちが日本人として、神奈川県人としてそして鵠沼の住人としての社会集団生活の制約がある以上その頃の民衆は厳しい集団生活を強いられた。

山上憶良が歌った如く

鳥のように飛び立っていくこともできなかつた

集団は集団として力と権力を保持し切りぬけていかねばならなかつたのである。私はこれを鵠沼を包含する大庭御厨にその典型的の姿をみる事ができこの社会集団の特殊性から鵠沼の厂史を追及していきたく考えている。

天養二年（一、一四五年）当時源義朝は鎌倉に在ったが突然、鎌倉、高座両郡の境である俣野川（現境川）を越え郡境に近い大庭御厨内鵠沼郷に不法侵入し来り、「鵠沼」をもつてこれを鎌倉郡の内だと称して数々の乱暴を働いた事件があつた。

（自分の領内で乱暴を働くなどはおかしい話なのであるが鵠沼地区がはつきりした

領内に属していなかつた証明ともなりかつ、複雑な領地争い、境界争いの紛争に巻き込まれていたのであつた。）

その措置に関する斎主下文、神宮司符、国庁宣など、およびこれよりさき長承二年（一一三三）と保延七年（一一四一）になされた相模国解文を収めた「天養記」に記述されてある。

その中の大庭御厨解文によると、この御厨はもと彼の国の住人平景正が（双）先祖から相伝えて来た私領であつたが景正は神の威徳を蒙るために他の例にならつて、伊勢大神宮の御領を寄進した」とある。

「吾妻鏡」にも鎌倉権五郎景正永久五年十月三日私領相模国大庭御厨を神宮に永代寄進したとある。中央の権門勢家、地方豪族が所領獲得に地道をあげた時代、微力の集団が生き延るる手段としては強大な宗教勢力のひ護のなかに入るのが一番安全であつた。

これによつて大庭御厨と称せられる現藤沢地域は長い間曲りなりに神域として

他からの侵略を防ぐことができたのである。

大庭御厨とは

高座郡内にあつて東は玉縄御庄と俣野

川で境いし、南方は「海」、西は

「神郷」と接し北は「大牧崎」にいたる

と説明されている。

「玉縄御庄」は、いまの鎌倉市大船の北方に 玉

縄城趾があり明治二十七年に玉縄村

が置かれた岡本の城廻、植木、岡谷、山谷

新田飛地など諸村と村岡郷五ヶ村

(渡内、小塚、高谷、宮前、弥勒寺)

などの地域と考えられる。

俣野川は現在の境川である。

「南は海」とは鵜沼から辻堂などの海岸線

であらう。

「西の神郷」境の神郷とは寒川神領を指す。

「北境大牧崎」については、いまの「大庭野」北

辺あたりと考えられる。

「吾妻鏡」に大庭野は鎌倉時代に鎌倉武士

の鷹場であり牧場であり文治元年

(一一八九)十一月十七日源頼朝は鷹場を御

覧のため大庭野に出真くらになつて渋谷

重国の館に入り一泊して翌日に鎌倉へ帰還したとある。(渋谷氏は現在の高座渋谷辺を領地とした)

大庭御厨ははじめ郷であつたが高座郡の条に御庭郷とみえている。この郷が伊勢大神宮に寄進されて御厨となつたと言われている。

大庭御厨の地域は、高座郡十二郷のうち大庭郷(大庭を本郷として南は

羽鳥、辻堂、西は茅ヶ崎市小和田、菱沼、宮田、香川)土甘郷(鵜沼、藤沢の全地域のほか滑堤郷の一部と河合郷(茅ヶ崎及び中世の懐島郷の地域と仮定)の大部分を含む。

そこに鵜沼の名前がみられるがその地域は現在の鵜沼内の本鵜沼の地区で鵜沼神明社を中心とする地域である

う。本鵜沼地域には横須賀遺跡を はじめ、八部遺跡、藤原遺跡

などがありまた高山(鷹山)遺跡もいまは行政上は辻堂地域であるがかつては地勢ともまた文化圏の上でも鵜沼地区に在つたと考えられる。

大庭御厨の成立の当時の領域ははつきりわからず開発が進むにつれ未開の原野が開拓され、そして人間の生命の糧が稔り産み出されると共にまた紛争の種が生れた。人間の欲望は常に弱肉強食の世の中となり侵略、殺りく、強奪が繰り返される中に砥上ヶ原と呼ばれた鵜沼の地も幾十星霜を送ることになる。そして伊勢神宮の神領とゆう特殊の地域として三百数十年を生き伸びる事となる。そして戦国時代に入り後北条氏、すなわち伊勢新九郎長氏が小田原に居城を置くや両上杉氏を滅ぼし、いわゆる小田原衆に知行させこゝに大庭御厨は消滅する事になる。この三百数十年の厂史を知る限り次回より記述していきたい。知られざる厂史のロマンが砂の中、川の中或は草や森の中から発見されるかもしれない。そして、それを発見しそこに生命をよみがえらせるのが私は厂史家として、人間としてのつとめだと信じている。空も、山も、川も、野の草もそして風も永遠の厂史を秘め語り続け



ている。
「小田原家所領役帳」によると
鵜沼 七十三貫七百六十七文 知行者 岩
本太郎左衛門、羽鳥、辻堂 百十二貫
十七文 知行者 関兵部丞 とある。
この一、二行の中にどれだけの事実が秘められていくかもしれない。
更に伊勢神宮領として長年の信仰
は地域の住民の生活に深く浸透し鵜沼
神明社の如く現存しなお連綿として信
仰が受け継がれている現実を知れ
ば更にいま一度深く鵜沼の厂史を探
究する意欲にかられるのである。(つづく)



明治青年大学生と史跡を歩く

九月十七日、初秋の空、や、薄曇り、
鵜沼青年大学の学生を引率して鵜沼の
史跡を歩いた。

午後一時三十分出発総勢三十二名、
鵜沼公民館を出て海岸に向い引地川
に達する。二、三日前の雨で川は濁って
いたが晴れて水がぬるみ澄んだ時など魚影
が濃い。

イナの季節なのである。

橋の上からは太ったハゼがノンビリひるねをして
いるのか川底にへばりついて見えている時もある。
薄曇りのためスロープ状の歩道橋から富士も大島も望めなかつたが、何年振りかで海をみる人もいるとの事で胸一ぱいに潮風を吸い込む姿がみられた。

往年の松林には遠く及ばないが、三十数年の努力がやっと海岸線に松林を定着させつゝある。

中国国歌（義勇軍行進曲）の作曲家
轟耳の故事と、その記念碑を葉山市
長が俳句誌に掲載した小文を引用して
説明する。昭和十年七月この薄命の天才音楽
家は二十四才の短い生涯を鵜沼沖に沈め

たが、その芸術は永遠に残る。
動乱の中国、波乱万丈の中国、
真の革命は国として成し遂げられ
たのであるうか

巨星毛沢東墜ちて僅か旬日、
ふた、び動乱の兆動く中国に波濤を
越え、この若き天折の芸術家はいまだに
何かを訴え続けているのではないだろうか。

鵜沼の海もまた永遠の歴史を秘め、潮
騒も松風も永遠の過去から未来を

私達に語っている。

サイクリング道路を茅ヶ崎にむかい三百米位
歩き国道に出さらに引地川を日ノ出
橋に出て、最近完成した散歩道の
並木をぬけて小休止とする。

ここまでは約一時間、明治青年達に
とつてはこよなき道程であり、この
遊歩道のベンチも絶好の休憩所であつ
た。こゝで「鵜沼を語る会」第一号か
ら「平家物語」を語る、
特に降人平宗盛（マ）が鎌倉に引かれ
この砥上原と称せられた鵜沼の原を通
つていくくだりは秋の昼下りには印象

的であつた。

八松、堂面、八部、藤原と数百年前からの地名がいまだに残る。

引地川を土手づたいにススキを分けて歩く。

萩、尾花、葛の花 撫子、女郎花

藤袴 朝顔「万葉集」にあげられ

た秋の七草であるがこのうち朝顔は今の昼顔 桔梗、或は木槿だとする

説がある。

鵜沼の草叢には時々ナデシコや菊の花、おみなえしもみかける

ナデシコで思い出されるのは茶道の奥義をきわめられた出雲の藩主松平不味公の言葉である。「茶礎」の中に

「茶の湯は稲葉における朝露の如く枯野に咲けるなでしこのようにあり

たく候」とある。不味公のカワラナデシコのイメージを表現しているものでありまた

なでしこの在るべく姿としてびつたりと思う。酔て寝るなでしこ石ノ上 芭蕉

露の世や露のなでしこ小なでしこ 一茶

ここで私も大俳人にならい一句ススキ枯れ平家の書を聴きにけり



芒（ススキ）には蕪村の有名な句もある。

山は暮れて野はたそがれの芒かな。

また伝説と言えば葛を思い出す。

恋しくばたづねきてみよ和泉なる

信田の森のうらみ葛の葉



人間と狐の交情濃い口マンを思い浮べ

とその辺りから狐がポンと飛び出してくるような気もする。



葛は山野に自生する一年草で秋風に白い葉裏をみせ紫の細い花をつけて根から葛粉をとり茎の繊維は

秋水
自
繪
也

引
水
月



網、葛布にする。こんな面から、人間生活に密着していたのかもしれない。したがって地名を詠みこんだ句が多い。

急雨来て葛のさわぎの北信濃 野風呂

葛咲くや孀恋村の字いくつ 波郷

鵜沼からは富士がよく見える、しかしあまりにも恵まれすぎた風景からか鵜沼から富士をみた芸術作品、文芸作品は少ない。

富士山の見えて雨降る刈り萱かな正一郎

どこからよんだ句かわからないが引地川辺の野原に萱が茂っている。



刈り萱に山を織り込んだ句も多い。

刈萱を牛に荷づけて二頭曳き（阿蘇山）占魚

刈萱野を出れば盤梯一角に 吐句楼

八部運動公園には一少年の投書がきっかけとなり、これもまた明治青年の青春と情熱で設置したSL機関車が十月一日の開場を控えて黒光りする勇姿を秋の薄日を受けて輝いていた。この機関車の歴史にも数々のロマンを秘めて感動的のドラマがあるう。



積乱雲はいつしか乱れ秋の翳雲は
薄く刷いて赤トンボの群れは流れる。

赤とんぼ葉末にすがり前のめり 立子



河原湯は寒し穂草に赤とんぼ 星竹

とゞまってふとあたりを見渡すと赤とんぼが
寄ってくる。とんぼはとても人なつつこいのであ
る。

とゞまればあたりにはふゆるトンボかな汀女

鵜沼公民館に帰ったのは三時四十分、
多少痛む足を引きずりつ、モリーダーとし
てこの美しい秋の午后を過ごした事は
極めて爽快であり、ホットしていたゝい
た御茶の美味さはまた格別であった。

(九・一七)

鴨のくる池

今から七、八年前、鵜沼の池には鴨の姿
など一羽もみかけなかった。

「初雁といえは風雅を思い

初鴨といえは風味を思う」

と「梨草」にある。そんな鴨を二、三羽み
かけてから私はできる限り餌づけを心が
けた。三十羽になり百羽になり

昨年あたり三百羽を越えた。

考えてみるとそんなに餌があるわけがな
い。鴨はねぐらを求め池にやってきた
のでありそんな静かな森や池が鵜沼に
もあったのである。

鴨は海岸に行つて餌をあさり池に帰つ
て休息していたのである。

海もいくらかきれいとなり餌になる雑魚
もふえたのである。

今年も、もうそろそろ鴨のやって
来る季節となった。

神楽舎翁のこと

(昭和六年頃)

鵜沼海岸駅でありて、神楽舎かばらのやをたずね

あてたのは、たしか冬の日の、午前一〇時ごろ

であった。おもやで刺を通じると、書齋に

来るようにということとで案内されて離れに

行った。途中に池があった。

池には舟がつないであった。離れの床

の間を背にして、先生は書きものをし

ていらっしやった。

ベンをおいて、白髪のごうべをあげ、庭に

立っているわたしどもに、視線をそそが

れた。

さ、あがりたまえ。とおっしやった。笑

顔であった。

わたしどもは、机をへだてて、先生と相

対した。

先生は茶色の麻のそでなしを召して

いら(ヌ)やった。鼻の下のひげは、濃く黒

く、あごのひげは短かった。よく

みると、白髪は、かつらであった。机の

上の小さな手あぶりで火をつけて、キセル

でたばこをスパリスバリと吸われた。

どんなお話をうかゞつたかはおぼえて

いない、おいとましようとしたら、

また来たまえ。とおっしやった。

おもやに立ち寄ると奥さまがおひる

の用意がしてあるからと勧めてくだ

さった。

あたたかい炊きたてのごはんは、こんにやく

や豚肉の入ったみそ汁であった。

勧めてくださいるまゝに、わたしども

はいくつもおかわりをした。

お子さまがたもご一緒であった。

一番上の雪子さんは、女学校を

出られたばかりであったが、国語科中

等教員の検定試験を最年少で

合格なさったということであった。

喜久子さんは、おさげの、

かつみさんはおかつぱの女学生で

あった。

磐木さんは中学一年生であったが、

小学五年終了のまゝ、特別に入

学を許可せられたのだそうである。

池につないであった舟の名は「いはき丸」で先生の命名であった。

池には食用蛙がいて、夜になると牛蛙の別名のとおり、その鳴き声に、目をさますことがあるとゆうことであつた。

わたしどもはことばには出さなかつたけれども、先生と、先生のご家族のあたたかいおもてなしに感動し、このまゝ、電車に乗つて帰つてしまふのが惜しいような気がして歩いて江の島へ出ようということになった。

砂丘にさんさんとふりそそぐ日の光がまぶしく、汗ばむほどの暖かさで、まだまだ冬と思ひこんでいたわたくしを驚かせた。

横須賀に帰つてから、三人で寄せ書きして礼状に代えた。
(木村 新)

(昭和6年頃)

吉野秀雄と松岡静雄

吉野秀雄大人が神奈川県鶴沼の父の書齋 父はこれを神楽舎さくらやと名

づけていたが、一夕土地の老人がおかぐらはどこでやっているのかと尋ねてき大笑したことがある を足しげくおとづれられた昭和六年からの数年間のことは残念ながらはつきりとして残っていない。

仕事の間は、母屋からわずかに離れた書齋に稚ない者たちを寄せつけないのが、父のならわしであつたから大人に直接にお目にかかつたことも両三度しかなかつたように思うし、まして、一望の青田をこえて遠く富士や箱根の山々を見わたせた書齋の中でどのような交流が大人と亡父との間にあつたかは知るよしもない。たゞ書齋のふすまが新しく張りかえられて、「これは鎌倉の吉野

さんがわざわざ御実家の吉野藤から持つてきて下さったものだ」と繰り返し聞かされて、大人の名前が記憶に刻みつけられた程度である。……

・・・中略・・・

現代において古代を生きたことは、現実には不可能である。しかし、それが不可能

とわかっていればいるほど、胸中にあるものはますます鏘然としたひびきを立てる。

歌人としての吉野大人の心をとらえたものが、もし父にあったとしたならば、それはこの鏘然たるひびきであったのではなかったかとわたしは考えられている。
(松岡 磐木)

父のこと母のこと

「お帰り」と勢よく門を入ってくる車夫の声、かじ棒が置かれる音にあわせて私たち

私たち子供は、母にくつついて玄關に「お出むかえ」にでる表玄關は石段が五段もあってそばに紫のもくれんが

よく匂っていた。リノリウムが冷たい。こうして父は毎日務から帰ってくる。いかめしい帽子を母に手渡し、母はうやうやしく受取り、二人は無言で

二階の書齋にあがって行く。私はホットしてすみに置かれてある極楽鳥の金色の羽根を横目にみながら、また遊びのつぎにもどるため廊下を走る。……中略。……

震災のときはじめて避暑に鶺鴒沼の山口紋蔵さんの離れを借りた。九月一日から学校が始まるので、子供たちは母と先に東京へ帰ったが父はもうすこし涼しい鶺鴒沼に残った。そしてあの大地震にあった。二階の家は二秒とた、ないうちに、へっしやんこにつぶれたというが父は桑の木で作った軽いテーブルが支えとなつて、九死に一生を得た。ちょうど東久邇宮家も御滞在在中だったが、亡くなられた方もあつて、どうしても皆さまを東京までおつれするか、問題となり、父が「昔とつたきねづか」で相模湾に軍艦を停泊させお供して東京湾からお帰りになられた。

・・・中略・・・

日韓会談がはじまり李弘植高麗



大学教授は日本の土を踏まれた。．．．．
 ．．．．
 若い学徒をことのほか愛した父は、
 書齋の裏の山口さんのいもばたけに大き
 なテントを張り、自炊ができるようにし、青
 年はみなこゝで過ごした。夏は寮
 歌がひびき、笑い声が絶えなかつた。
 そこは父の学問に対する姿勢を愛
 して下さる若い方々の巢になっていた。
 七、八年前、扇谷正三さんにお目に
 か、つた時「僕はテント大学の卒業生
 よ」と話されたが、ほんとになつかしい
 一時代であつた。こゝの「ぬし」が
 いまは亡き李弘植さん（四五年春ガンで
 死亡）で、その学友へと輪は広がつ
 ていった。女性は母屋にたむろし、
 昼間はそれぞれ勉強したり、家事
 見習にいそしみ、夕食の五時まで
 をあわただしく過ごし、たまにテン
 トの連中と合流して延々夜を徹
 して大議論に熱中したり、
 連なつて泳ぎにでかけたり、青春を
 楽しく過ごした。自分の意見をま

とめること、ものを考えることを自然のうち
 に学びえて、私にはこの交わりが今も非常
 に役立っている。

父は朝の眼覚めが早く、すぐ書きものに
 とり組んでいた。母はそれの前に書齋を整
 頓して風炉の湯をわかし、略式なが
 ら茶せんさばきもあざやかに朝茶を
 一服たてまつる。これを日課として毎朝四時
 に必ずやつていた。これを日課として毎朝四時
 母屋とのつゞきの庭を、そくそく歩いてい
 た母を見かけたことがあつた。．．．．

（野口喜久子）

以上三編は松岡静雄御令嬢野口喜久
 子氏編「砂のいろ」から抜粋。



私が少年だった昭和十二、三年の頃、藤沢から鵜沼海岸にやってくるのには、車なぞなかったから小田急と江ノ電の二つの方法しかなかった。

私はどうゆうわけか距離的には遠い江ノ電

の方が多かった。私と江ノ電とのつながりは少年の

頃の悲しい思い出に連なる。私は藤沢小学校

に通っていたが小学二年の時、同級生が藤沢駅の

踏切りで汽車にひかれ即死した。その頃同級

生の多くは小田急や江ノ電で藤沢小学校に通って

いたのだが現在のような地下道ではない。必ず

ふみきりを通ってこなければならぬ。東海道線

は藤沢に入る直前急カーブを描いており

大変危険なふみきりであった。友人は傘でふみ

切りの上げ下ろしをよく確認せず飛び出してひかれ

たのである。運命のいたづらと言おうかその列

車には横浜から通っていた担任の先生が乗って

いたのである。その当時十九才の若い美しい西川

春代先生はその時から憂愁のかげりをたゝえて

笑顔を見せなくなつた。私は先生につれられ柳

小路の駅の前の友人の家にお線香をあげにいつ

た時始めて江ノ電に乗った。私はその時から

江ノ電にのる度に友人の家を眺め優しく美しく



悲しげな顔の西川先生を思い出すのである。

そんな事も一つの理由だったかもしれないが

つい江ノ電に乗った。そしてゴトゴト揺られあの

段々のある電車が好きだった。そして鵜沼から

海岸への道の静かさが私をひきつけたのか

もしれない。松林や小さな竹やぶや、シャレ

た別荘など子供心に本当に静寂で美しい

と思つた。もちろん海岸まで裸足であった。

木影と直射日光の砂の道は色彩だけの濃

淡ではなく私に心よい刺激と興奮を与えて

くれた。私達はキヤアキア騒いで熱い砂地を

走り木影にくるとお互いに足の裏をみせ合つて

は笑いあつた。

引地川の分流が今の鵜沼稲荷の辺から

ぬけ鯉取川と称せられところまで美しい

流れをみせ浅く小魚がすくえた。

ゴミやガラスや空きカンなど全くなかつた。

母や祖母達は松林の松露やハツタケ取りに夢

中だった。

引地川はよく流れを変え鵜沼橋

はよく壊れた。私は足げた登り子ガニや

貝がらが吸いついているのが好きだったが時々

その友達も橋げと一緒に流失した。

秋になるとハゼが丸まると太りボラは

勢いよく飛んだ。私は六年前の鵠南小学校の P T A の機関誌に「引地川のボラ」とゆう一文をのせたがそれは全く少年時代のイメージのみであり六年前は油が重苦しく流れボラなど一匹も生棲せず私は狂人扱にされた。

私はそのイメージをとり返そうと必死となり海岸清掃と河川浄化運動にとり組んでいったのである。

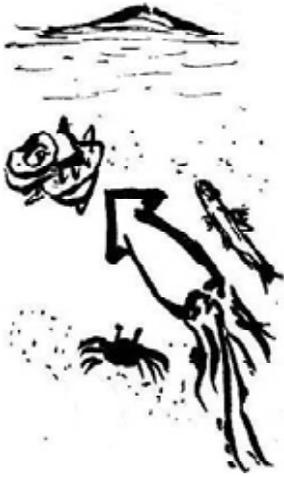
今送られてきた「波」という俳句誌にこんな句がある。

蟹の目にまた釘を打つ海の家

海の家も何となくひなびてのんびりしていた。たしかお風呂があつたような気がする。次にはこの海の家の変遷でも書いてみようと思つている。

また地引き網にサバ、イワシ、ソーダガツオイカ等が鮮やかにピンピンはねていた。

いずれにしてもそれがすべて絵となり詩となつていたのである。



(つづく)

あとがき

昨年は九月一ぱい日照りが続き十月に入つてから長雨になつたが今年はだらだらと一年中雨が続けている。サツマイモも甘味がない。

昨年は十一月に番場定八さんや福地誠一さん達と第一回の「鵠沼を語る会」を開いてサツマイモをふかして食べた。そんな「鵠沼を語る会」にしたいと考えていたがやっと糸口がみつきり出した。

本当の意味の住民の厂史ができるかもしれない。

こんな雨の続く中一日真青の空がみえた。あゝ秋なんだなとい(双)海に出てみた。白鳥のような雲が一つ浮かんでいた。

白鳥は悲しからずや空の青 牧水

海の色にも染まずただよう

そして

幾山河越えゆけくれど

寂しさの果てなむ国ぞ今日の旅ゆく

こんな人間の姿に歴史の永遠をみるのであつた。

(十月二十一日)

昭和五十一年十月二十九日発行

藤沢市鵜沼海岸二丁目一〇番三四号

藤沢市立鵜沼公民館内

鵜沼を語る会

電話(36)七四三一